

追悼—石井清一先生のご逝去を悼む



石井清一先生 略歴

昭和12年3月31日生

昭和36年3月 北海道大学医学部卒業
 昭和37年4月 北海道大学医学部整形外科学講座 副手
 昭和41年3月 北海道大学大学院修了
 昭和43年4月 北海道大学医学部整形外科学講座 助手
 昭和43年9月 米国コロンビア大学留学
 昭和44年10月 北海道大学医学部整形外科学講座 講師
 昭和47年5月 北海道大学医学部整形外科学講座 助教授
 昭和51年11月 北海道大学保健センター 教授
 昭和58年7月 札幌医科大学整形外科学講座 教授
 平成14年4月 札幌医科大学 名誉教授
 平成14年4月 北海道医療大学 客員教授
 平成14年4月 医療法人東北海道病院スポーツ医学・手の外科研究所所長
 令和3年4月26日 逝去(享年84歳)

【学術集会 主催大会長】

平成元年 第15回 日本整形外科学スポーツ医学会会長
 平成3年 第3回 日本肘関節研究会会長
 平成3年 第5回 東日本手の外科学会会長
 平成5年 第36回 日本手の外科学会会長
 平成6年 第8回 日本靴医学会会長
 平成8年 第29回 日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会会長
 平成10年 第10回 日本理学診療医学会会長
 平成10年 第9回 日本臨床スポーツ医学会会長
 平成12年 第16回 日本義肢装具学会会長

などを歴任。

【学会役員】

日本整形外科学会名誉会員
 北海道整形災害外科学会名誉会員
 日本小児整形外科学会監事
 日本骨粗鬆症学会評議員
 日本義肢装具学会評議員
 日本癌治療学会編集委員
 日本理学診療医学会理事
 日本肘関節研究会理事
 文部省学術審議会専門委員
 日本臨床スポーツ医学会理事

などを務める。

【受賞歴】

昭和61年 北海道医師会賞・知事賞「手指屈筋腱損傷の修復と滑動性の獲得に関する研究」
 昭和63年 財団法人高松宮妃癌研究基金海外派遣研究者「悪性骨・軟部腫瘍の診断と治療に関する基礎的・臨床的研究」
 平成14年5月 日本整形外科学会学会賞受賞
 平成28年11月 瑞宝中綬章叙勲

令和3年4月26日、日本整形外科学会名誉会員、札幌医科大学名誉教授、元本誌編集主幹の石井清一先生が享年84歳で帰らぬ人となりました。こんなに早くお亡くなりになられるとは全く思っておりませんでしたので、訃報に接しました時は、驚きを禁じえませんでした。

先生は昭和36年に北海道大学医学部をご卒業され、東京日赤中央病院でのインターン後、北海道大学(北大)の大学院へ進まれ「骨肉腫の染色体の研究」で医学博士を取得されています。昭和47年に北大整形外科の助教授、昭和51年に北大保健センターの教授に昇任されました。その後昭和58年に札幌医科大学整形外科学講座の教授へ就任されています。ご専門は手の外科とスポーツ医学で、退任後は東北海道病院スポーツ医学・手の外科研究所の所長もお務めになりました。

私が先生とお近づきになれましたのは、先生と田島直也名誉教授(宮崎大学)がスポーツ医学をとおして懇意にされておりましたので、日本整形外科学会などの学会・研究会、中でも日本整形外科学スポーツ医学会や日本臨床スポーツ医学会において様々な場面でお話しをする機会があり、いつも優しくお声を掛けて頂き、科学的な研究の重要性だけでなく、何事にも謙虚な姿勢などをご教授くださいました。そして、本当に北海道を愛されておられる先生だったと思います。

本誌『関節外科』との関わりは、昭和64年Vol.8

から5年間 編集委員を、平成8年から3年間 編集主幹を、平成14年から19年間 編集顧問をお務めいただいております。編集主幹として最初に編集された「手関節および手根管の内視鏡手術」では、山内裕雄先生(順天堂大学教授、現 名誉教授)、奥津一郎先生(日本赤十字社医療センター副部長、現おくつ整形外科クリニック院長)、二見俊郎先生(北里大学助教授、故人)との座談会を企画していただきました。当時、関節鏡視下手術が広がりつつある状況の中、論文だけでは伝わりきらない、関節鏡手術の発展に果たしたわが国の歴史や手術の開発秘話・その有用性を読者にわかりやすく届けてくださいました。

またその一方で、第2代編集主幹として「編集委員体制の組織化」にご尽力いただき、現在の編集・発刊体制の基礎をつくられたことは、温かいお人柄と実直な先生でなければできなかったこととして編集部の印象に特に残っていると伺っています。そのお陰もあり現在、順調に『関節外科』が発刊されています。

引き続き先生の教えを請い「整形外科学」をとおして日本中の整形外科医を中心とした医療関係者に役立つ雑誌として『関節外科』を一層発展させることが、私たち編集委員の役目と思っております。

あらためまして、先生のこれまでのご功績を偲びますとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。

本誌編集主幹 帖佐悦男